



背面側。天板は背面上部分のネジを外すと上に外れる構造になっていて、さらにホーン/ドライバーを外すとウーファーボックスのフタがあり、それを開けると150-4Cウーファーが斜めに装着されている



Hartsfield 正面側。他社のシステムとは明らかにキャビネットのデザインコンセプトが違っていた。このシステムのために開発されたフロント正面上のゴールドに輝くホーンレンズは、スラットプレートに11枚組み合わせた構造になっており、その後のJBLの4300シリーズのモニターシステムには欠かせないデザインの音響パーツとなっていた

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

本文/田中伊佐資

製品解説/岡田幸司(アトリエJe-tee代表)
撮影/小林祥彦(彩紅舎)

■ 29回 JBL

JBL ランシングは1930年代頃から映画館や劇場用のスピーカーシステム用のユニットを多数開発しており、それらを使った大型のシステムも多くの映画館や劇場で採用され、高い評価を得ていた。1950年代に入るとアメリカでは当時の音響メーカーが競って家庭用の高級大型スピーカーの開発を開始。JBLも自社開発で既に定評のあったユニット類を他社と異なる斬新なデザインのキャビネットに搭載したモデルが数種類この頃から発表され、現在になってもその魅力はマニアの憧れのシステムとなっている。

D30085 Hartsfield

1956年に開発された大型コーナースピーカーで、発売当時は雑誌『ライフ』が「究極の夢のスピーカー」と躍えたと話題になった。キャビネットは複雑なフロントロード型の折り曲げホーンが採用され、この基本構造は当時のJBLのエンジニアであったハーツフィールド氏によって開発された。ユニットは当時の劇場用に使われた375Dライバーと150-4Cウーファー、N-500 ネットワークが搭載されている。また、このシステムのために開発されたL5090音響レンズがフロント上部にシンボリックに配置され、仕上げもマホガニーとブロンズが用意されていた



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

JBL



150-4C ウーファー。1953年にウエストレックスのシステム用に開発されたT-510Aが原型。JBLの130シリーズのフレームとマグネットは同種だが、サブリングが装着され、外注と思われる真鍮製の深いウーファーコーンが採用されている。このウーファーコーンのタイプは当時の Triu-Sonic や JENSEN の大型スピーカーに採用されたウーファーによく見られる



N500ネットワーク。シアター用に開発されていたものをコンパクトなケースに収納して3ステップの高域調整が採用されている



375 ドライバー。1953年にウエスタン4インチのダイアフラムを持つ594Aフィールドコイルタイプ。これをパーマネントマグネットタイプとして開発したT-530Aがその原型となる。初期型の375はグレー塗装のバックカバーが少し盛り上がったタイプで、JBLのシステムで最初に搭載されたのはハーツフィールドである。このドライバーはJBLの主力のユニットで数種類あり、1980年代頃までの大型のシステムに搭載されていた

雰囲気を一変させる威厳と 屈託ないストレートな鳴り

「ここ何回か大型スピーカーを続けようかと思っています。前回がタンノイのチューダー・オートグラフ。今日はJBLのハーツフィールド」

アトリエJe-teeの岡田さんはそう告知した。もちろん決まっているようではあったが「お楽しみ」がその答えだった。

ヴィンテージの大型スピーカーは、歳月を経た高級家具と等しい。だからそれ相応の部屋、大きくいうと家づくり用意する覚悟がないとみつもめないことになつてしまう。つまりはオーナーの趣味が問われる。「オーディオはまず部屋から」という言葉があるが、また違った意味で「部屋から」なのだ。

店にあったハーツフィールドも周囲の雰囲気を一変させてしまうような威厳があった。オレを減多なところに置くなよという顔をしている。それだけ上物だ。

「モノラル時代のスピーカーなので、これだけきれいなものをベアにするのはなかなか難しいですね。ユニットも当時のままです。アメリカのコレクターが大事に持っていたんです」

良好な聴取位置に座り、左右2台を交互に眺めているとおもむろに「アトリエ・ベッパ・ミーツ・ザ・リズム・セクション」が始まった。

レーベル、コンテンポラリーの名盤。両者はドンビシヤなマッチングを示した。カラッとしたアルトが伸びやかによく歌う。でも軽々しくない。ビートはジャズ特有の粘りや重みも兼ね備えている。本当に2ウェイですかと投げかけたくなるほどレンジは広い。特に高域の伸びが大型ドライバー一発とは思えない。

「初期型の375は振動板が薄くて軽いですね。そのため繊細な表現もできます。アンプはやはり管球です」

375の背中はバブルバックと呼ばれる山高帽を被せたような形状になっている。後期の黒い375とは、モデル名が同じでもだいぶタイプが違うらしい。

次の「アズ・タイム・ゴーズ・バイ」を歌うジュリー・ロンドン。彼女の専売特許というか、いつものようにしつとりしたムンムン調で迫ってくる。でも、こっちに重くもたれかかってくるような憂鬱さがない。この歌手には計算尽くにも思える色仕掛けの節回しに閉口することがあるのだが、ハーツフィールドの屈託がないストレートな鳴りがそれを済めさせている。

そういえばハーツフィールドは部屋の隅に置く設計になっている。試聴では一般的なスピーカー・セッティングだった。しかしそれでも十分によかった。設計の意図通りに置いたら、どんな音になるのだろう。やはりこのスピーカーはそれなりの甲斐性が必要なようだ。